道内各地で進展する地方創生プロジェクトの最前線をクローズアップ！

北海道創生ジャーナル 創る

Vol.19
2022.3
その先の、道へ。北海道
Hokkaido.Expanding Horizons.

CONTENTS

特集 若い感性で地域に新たな風を吹き込む!

01 地域おこし協力隊

■ 地域教育で未来人材を育成（浦幌町／古賀詠風さん）
■ 老舗菓子店を事業承継（中頓別町／中野巧都さん）
■ ローカルベンチャースクールから起業へ（厚真町／西埜将世さん）

05 地域が動く・プロジェクト最前線

■厚沢部町『保育園留学』を通じた地域活性化・長期的な関係人口創出の取組

07 「なおみちカフェ」から ～地域創生のヒントを探る～

知事が地域訪問する機会に地域で活躍されている方をお訪ねし、その様子を紹介するコーナー

■上川編　当麻町「サウナバス」・役場庁舎
■釧路編　厚浜木材加工協同組合

09 「つながる。HUBest」

人と地域とのつながりを生み出すワーク施設とコンシェルジュを紹介

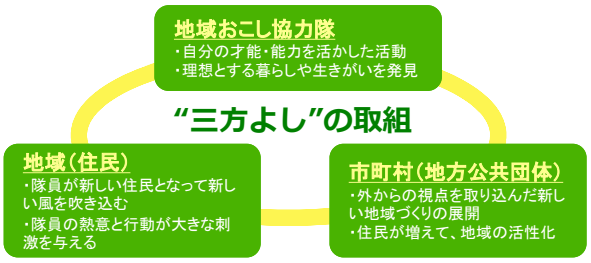
■コワーキングカフェ＆バー大人座（札幌市）　五十嵐慎一郎さん
■コミュニティスペースイチカラ（厚真町）　成田智哉さん

特　集

若い感性で地域に新たな風を吹き込む！
地域おこし協力隊

道内の地域おこし協力隊は、毎年増加し、地域活性化はもとより地域の担い手確保など人の流れを作るきっかけづくりとして定着しており、多くの隊員が地域に新たな風を吹き込む存在として地域振興の様々な場面で活躍しています。

地域おこし協力隊の業務は、地域の魅力発信や移住定住の促進、特産品開発など幅広く活躍しているほか、取組をきっかけに地域に活力を与え、担い手育成や若者の活躍の場づくりに結びつけるなど、地域活性化に欠かせない存在となっています。



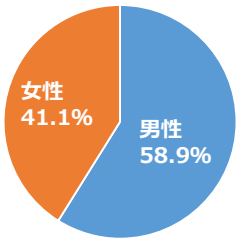
地域資源を活かしたさまざまな活動

道内の地域おこし協力隊員数は、令和2年度には686名と、多くの方々に活躍いただいており、その半数が道外からの着任となっています。

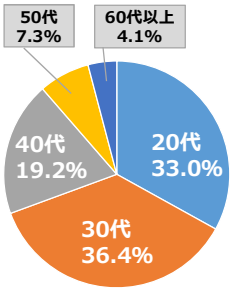
活動内容は幅広く、農畜産業などの一次産業への従事や観光資源の企画・開発、観光サービス、教育・学習支援のほか、自ら地域課題解決のためのテーマを設定し、事業を推進するフリーミッション型や地方公共団体が地域で起業する人材を育成する取組など様々で、いずれの活動でも地域の資源を活かした取組が行われています。

隊員６８６名の内訳

①男女構成



②年齢構成



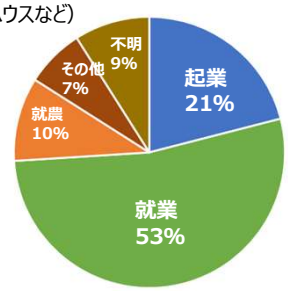
（R2.3.31現在）

活動後も定着し地域活性化に貢献

地域おこし協力隊の任期を終えた方々の多くは、活動した市町村やその近隣市町村に定住し行政関係や農業、飲食サービス、観光業などに就業しています。また、カフェやレストランなどの飲食業、デザイナーや写真家、ゲストハウスを始める方、農家として就農する方など様々で、最近では、後継者不在の老舗店舗を引き継ぐなど、事業承継される方もおり、自身がやりたいことを実現させて地域に貢献するなど、地域づくりの担い手として引き続き地域活性化のために活躍されています。

道内に定住した隊員の進路

■主な起業分野
・飲食サービス業（古民家カフェなど）
・デザイナー・写真家など
・宿泊業（ゲストハウスなど）
■主な就業分野
・行政関係
（自治体職員・集落支援員など）
・飲食サービス
・農業



（R2.3.31現在）

北海道の活動支援

道では、協力隊・地域・市町村の思いが一つになり、地域活性化が図られるよう、地域おこし協力隊制度の効果的な運用や活用の促進に向け、次のような取組を行っています。

①情報発信
協力隊の活動状況、募集・採用情報、定住・定着に向けたサポート情報などをワンストップで得ることができるようにホームページで公開しています。併せて、協力隊員へ直接発信するメールマガジンを発行しています。（左記QRコードからアクセスできます。）

<ホームページ>

<メールマガジン>

②活動サポート
総務省や地域おこし協力隊サポートデスクと連携し、協力隊制度を効果的に活用するためのサポートをしています。また、市町村職員などの実務担当者や協力隊員を対象とした研修も行っています。

③定住・定着に向けた支援
任期終了後の定住・定着に向けて、起業などに利用できる制度の周知や隊員向けの個別相談会の実施、住宅・リフォームローンの周知・PR等を行っています。

次ページからは、協力隊・地域・市町村それぞれの思いがマッチし、地域資源を活かした事業を展開する地域おこし協力隊員・元地域おこし協力隊員を紹介します。

●地域の教育で未来の人材を育てる●

浦幌町 地域おこし協力隊 古賀詠風（えいふう）さん

▲「うらほろスタイル複合施設FUTABA」町内外から来る人々の交流拠点にもなっている。

▲浦幌部の中学生と一緒に活動をする古賀さん

【プロフィール】
オホーツク管内の遠軽町出身。北海道大学教育学部を卒業後、浦幌町の地域おこし協力隊に就任し「うらほろスタイル」の担当として中高生のサポート業務に従事する。今年３月末の任期終了後も町に留まる予定。

浦幌町では、地域に住む大人が、過去から受け継いだ地域を次の世代に引き継ぐことを目指し、子どもたちを軸に、学校や地域が連携して様々な事業に取り組む「うらほろスタイル」を実践しています。

古賀さんはそんなうらほろスタイルの魅力に惹かれ、地域おこし協力隊となり中高生の地域活動のサポートに取り組んでいます。

▼浦幌町との出会い

教師になることを志し、大学で教育について学んでいたものの、どこか物足りなさを感じていた古賀さん。学びの場をキャンパスの外にまで広げ、地域活動に参加することで、「学校教育の外にも教育がある」という思いが日に日に増していきます。その活動の中で浦幌町の地域おこし協力隊の方と出会い、「うらほろスタイル」を知り、実際に浦幌町を訪れました。

そこで教員だけではなく、地域全体が一丸となって子どもたちのために取り組む姿を目にしたことで、「ここで教育に関わってみたい」と思うようになり、地域教育に携わることの出来る浦幌町の地域おこし協力隊を選択しました。

▼浦幌部との活動を通じて

浦幌町では平成22年に浦幌高校が閉校となり、町内には高校がありません。しかし、閉校から5年、町外に進学した高校生たちが、地元との関わりを持ち続けたいという思いから、平成28年に自分と地域の将来について考え活動する「浦幌部」という団体を立ち上げました。

古賀さんは放課後や土日などの学校時間外に、浦幌部の生徒たちと一緒になって町のためにできることを考え、高校生の思いを形にできるよう活動をサポートしています。また、中高生たちと対話し、ものの見方や考え方を深め、自分の人生について見つめ直す進路相談のような業務も行っています。

令和2年度には、活動が制限されているコロナ禍においても、高校生たちが自分たちが出来ることとして映像制作を始め、町の様子をＹｏｕＴｕｂｅで町外に発信しています。

そして、高校生の背中を見ていた中学生が「中学生版浦幌部」を立ち上げ、今では期間限定のカフェを開いたり、地元を題材にした絵本を作るなど、浦幌との関係が得られる様々な活動を繰り広げています。

子どもたちの「やりたい」が詰まった企画提案を町の大人たちと一緒に実現することで、中高生が地域の魅力を再発見し、自分たちの町へ自信と誇りを持つようになり、それを次世代へ継承してゆく流れが生まれています。

▼子どもたちの変化と今後について

「3年間の活動を続けるなかで、もっと町をよくするために何かしたい、といった子どもたちの自主的な活動が以前よりも活発になってきたと感じています。町外に進学などで浦幌に在住できなくても地元と関わりたいと思っている多くの子たちにきっかけを作れたことは大きな可能性を感じています」と語る古賀さん。地域に仲間が増えたことや、子どもたちの成長を見届けられること、なにより自分がもっと町で活動を続けたいと思ったことから任期終了後も、町内で中高生や若者の学びに携わっていく予定です。

「これからも町の中で学びの機会を創ることはもちろん、町外に離れた若者たちが、もう一度町と関わることにもアプローチしたい。その機会を創り、もっと地域との関係性が得られる瞬間を、子どもたちの日常に創っていきたいと思っています」と意気込む古賀さんのチャレンジはまだまだ続きます。

担当者の声

浦幌町まちづくり政策課
係長　井上 亨さん

町の方から「地元以外の方が町のために頑張っている姿を見て、自分たちも町の活動に参加してみようと思った」というありがたい声をいただきました。何にでも興味を持ち、人なつっこく、地元のコミュニティにうまく溶け込んでいる彼だからこそ、このように成功しているのだなと感じます。

・老舗菓子店を事業承継し地域の魅力を創る・

中頓別町 元地域おこし協力隊 中野巧都（たくと）さん

株式会社 ナカノ

▲とらや菓子店から引き継いだ「砂金ようかん」

▲中野商店外観

【プロフィール】
株式会社 ナカノ 代表取締役。1995年札幌市生まれ。高校卒業まで札幌市で暮らし、2015年から中頓別町の地域おこし協力隊として活動。その後、2018年より町の老舗菓子店を事業承継し、「中野商店」を開業。

北海道の北部、宗谷管内中頓別町で地域おこし協力隊として活動していた中野さん。協力隊の活動期間中に町で75年続く老舗の「とらや菓子店」が閉店することを知り、事業承継し、新たに「中野商店」として開業しました。現在は地元の雇用創出の場や商店街の更なる活性化の一助になりたい思いで地域の魅力づくりに取り組んでいます。

▼協力隊時代の取組と気付き

中野さんは協力隊時代、主に町の移住促進や観光振興業務に従事していました。その後活動の中で、中頓別町で採れた生乳を加工した商品の開発を目指し、カッテージチーズの商品を開発、商談会で好評価を受けたこともあり、商売として「ものづくり」をやっていける可能性を感じました。

任期終了後も「ものづくり」を通して地域の魅力を発信したいという思いをもっていたところ、商工会の方から老舗の「とらや菓子店」が閉店するという話を聞き、故郷には戻らず中頓別町に残り、菓子店の事業承継を決心しました。

▼事業を受け継ぐ

任期最後の年、中野さんは事業承継に向けてとらやの店主から、お店のお菓子の作り方を学びました。これまで製菓に携わることが全くなかった中野さんでしたが、失敗を繰り返しながら、地元の人に愛されていた羊羹や最中などの商品を受け継ぎました。

そして、開店のための店舗の改装など、多くの地元の人たちの協力を受け、「とらや菓子店」が「中野商店」としてリニューアルオープンしました。

▼大切なのは「地元志向」

「店舗を運営していく上で何より大切なのは、地元のお客さんに愛着をもってもらうこと」と語る中野さんは、観光客をメインターゲットにせず、出店のハードルが低いからと安易にネット販売することもなく、地域密着型の営業を続けています。

▼キッチンカーでの新たな挑戦

近隣の人にも知ってもらうため、SNSでの発信やチラシの配布を行いましたが、情報が届かない層がいると感じ、移動しながら直接宣伝・販売が出来るキッチンカーを整備しました。移動販売を続けるうちに「宗谷を代表するソウルフードを作りたい」との思いが芽生え、より多くの人に食べてもらうため、好き嫌いが少ないカレーの販売を始めたところ、宗谷地域で徐々に口コミが広がり、町外の人を呼び込むことに成功しました。

▼地域とのつながり

現在では、田舎暮らしに関心を持っていたご両親も中野さんの活動を応援するために町内に移住し、飲食店を始め、町内外の方々が交流できる場として、新たなコミュニティとしての役割を担っています。

中野さん自身は今後、文化やお祭りの面でも、一つでも多くの魅力を創って発信していきたいと考えています。

中野さんは「こうした地域を巻き込んだ取組で地域おこしにつなげていきたい」と笑顔で意気込みを語ってくれました。

▼地域に根付くために

地域に根付き、地域の魅力づくりに取り組む中野さん。ご自身の経験から自治体と協力隊のミスマッチを防ぐためには、双方が思い描く地域のビジョンを共有することや、3年後（任期終了後）の選択肢を一緒に考えることが、地域への定着を図る上でも大切だと教えてくれました。

▲行列を成すキッチンカーでの移動販売と大人気の仕込みカレー

●ローカルベンチャースクールから起業へ●

厚真町 元地域おこし協力隊 西埜将世（まさとし）さん

西埜馬搬

▲「馬搬」は山中で伐採した木を馬で運び出す作業のこと。かつては北日本を中心に盛んに行われていた。重機や化石燃料を使わず、作業道も最小限で済む点が環境に優しい。

【プロフィール】
1980年恵庭市生まれ。林業会社などに勤めた後2017年から地域おこし協力隊に。現在は西埜馬搬を営む。

馬の力を利用して、伐採した木を運び出す「馬搬」。その魅力に惹かれ、馬と共に暮らし、馬搬で生計を立てていきたいと考えていた西埜さん。そんな時に知人の紹介がきっかけで、厚真町ローカルベンチャースクール（以下ＬＶＳ）を知り、応募を決意します。

▼起業を目指して

厚真町では、地域おこし協力隊制度を利用して起業を目指す人を育成する取組、ＬＶＳにより地域活性化を進めており、選考による事業プランの磨き上げを経た後、経営ノウハウや先輩起業家とのネットワークづくりなど、様々な支援を行っています。西埜さんの馬搬で起業したいという強い意思と、ＬＶＳが求める挑戦を実現する人という人物像が合致し、２０１７年に地域おこし協力隊として採用され、西埜馬搬を立ち上げました。

▼馬搬の付加価値

馬搬で切り出した木の一部は、西埜さん自らが買い取り薪として販売しています。環境に配慮して伐採されている点が木材に付加価値をもたらし、最近では西埜さんの薪を指名して買い求める人もいます。また、薪はふるさと納税の返礼品としても需要が増えており、町のＰＲにも貢献しています。

▼馬がつなぐ地域や人とのつながり

西埜さんは、学校や放課後児童クラブの子ども達を対象とした体験活動にも携わっています。「最初は怖がっていても、お世話をする中でコミュニケーションをとれるようになり、手綱を持って馬を動かせる楽しさを感じる子どもが増えてきた」と子ども達の変化を振り返り、「もっといい活動にしていきたい」と意気込みを語ります。

また、西埜さんの林業現場には、子どもからお年寄りまで様々な人が集まってきます。見学したり、作業を手伝ったりという、普通の林業の現場では見られない雰囲気が生まれるのも馬搬の魅力であり、同時にそれは、地域のコミュニティの場としての役割も果たしています。

▲ポニーと触れあう子ども達。「馬搬だけでなく、教育面でも馬とともに関われるのはすごく面白いこと」と西埜さん。

さらに、西埜さんの元には、インターンの大学生など林業や馬搬に興味のある人が訪れることもあります。中には、インターン期間中に地域との関係を発展させ、その後も町内の農家さんの元でアルバイトを始めるなど、新たなつながりを築いて活動している例もあるそうです。

▼起業を通じて

馬搬をきっかけに、町内外で人と人とを結ぶ循環が生み出されているのも、西埜さんの「やりたいこと」が生業として実現できたからこそだと実感されます。チャレンジする仲間を求める厚真町に、今後も注目です。

担当者の声

厚真町産業経済課
主幹 宮 久史さん

西埜さんを採用した決め手は、「馬を使った仕事で食べて行く」と自分の生き方を決めていたからです。だからこそ、３年の任期を経てどうなるのか応援したい、地域の人たちにも彼のチャレンジを説明出来ると思いました。

任期後、無事に独立できるかは誰もわからないしリスクが伴うもの。しかし、成功しても失敗しても、説明責任は役場が負うものだと考えています。やりきってくれる人を呼ぶ、来てくれる人を信じた上で応援する、お互いの腹のくくり方が大切なのだと思います。

厚沢部町

「保育園留学」を通じた地域活性化・長期的な関係人口創出の取組

厚沢部町は北海道南西部に位置し、農林業を基幹産業とする小さな過疎のまちです。町では20年前に比べて約70％まで人口が減少し、過疎化が悩みでしたが、現実を受け止め過疎の良さを活かしプラスに変える『世界一素敵な過疎のまち』を目指し取組を進めています。今回は、関係人口創出を目的として始めた『保育園留学』について紹介します。

保育園留学誕生まで

厚沢部町では、全道のなかでも早い段階から、町が100％出資する『素敵な過疎づくり株式会社』を設立し『移住体験住宅』を活用した移住施策など行い、人口増に向けて外部からの人を受け入れる体制を整備してきました。

また、あわせて子育て支援にも力を注ぎ、山々に囲まれた町の特色を活かし、大自然の中で子どもがのびのびと生活できる認定こども園『はぜる』を設立しました。『はぜる』は移住者や地域住民が集う多世代交流ができる子育て支援拠点施設としてつくられており、町外の人でも短期間子どもを預けることが可能な「一時預かり」の制度を設けていました。

そうしたなか、移住体験を希望する道外企業の方からこども園への託児依頼があったことにヒントを得て、町ではこの『はぜる』に既存の移住関連施設や農業体験などのこれまでの施策を有機的に融合、連携させ、新たな子育て世代の関係人口を創出するために『保育園留学』というひとつのパッケージとした取り組みを開始しました。

保育園留学とは

保育園留学とは、一時預かり制度を利用して全国から町の認定こども園『はぜる』に留学したい子育て世帯を受け入れ、家族で1～3週間ほど町内に滞在していただくものです。町の豊かな食、大自然のなかで、のびのびとお子さんを育て、食体験や収穫体験を経験することで、都市部では味わうことのできない広大な土地の恵みや地域のつながりを感じられる体験をしていただき、『保育園留学』を通して、域外に開けた関わり方をしていくことで長期的な関係人口を築き上げていきます。

▲『はぜる』の周辺は自然に囲まれている。

保育園留学の一週間

保育園留学の期間中は、家族で町内の移住体験住宅に滞在し、子どもを認定こども園に預けている間、親は移住体験住宅や移住交流センターでテレワークをすることができます。また、子どもの様子は、子育てサービスアプリ「キッズリー」で確認出来ます。

週末は家族でメークイン、アスパラ、ブルーベリーなどの収穫体験ができる他、郷土料理教室、そば打ち体験、まいたけ工場の見学なども可能です。

「こども園はぜる」

『はぜる』は、自然あふれる木々に囲まれた広大な敷地にあり、園庭はこの地にあった公園の芝生や築山をそのまま活用しているため、子どもたちは大自然の中でのびのびと思い切り遊ぶことができます。

▲地元の木材をふんだんに使用し木のぬくもりを感じられる園舎

また、園内の遊戯室は天井が吹き抜け、地元木材で作製した遊具『でん』やブリッジキャッスル、ボルタリング、絵本のまちあいホールなど、子どもにとってドキドキとワクワクに溢れています。

「移住体験住宅・テレワーク施設」

『移住体験住宅』はこども園から車で5分のところにあり、生活用品が一通り揃っているだけでなくＷｉＦｉも完備され、住宅でのテレワークが可能となっています。また、住宅の隣には移住交流センターがあり、こちらにもＷｉＦｉが完備されていることからテレワークが可能となっています。

▲３歳未満児用の園庭
（子どもの年齢に合わせた環境設定）

▲幅広いニーズに対応可能な２～３ＬＤＫの移住体験住宅が３棟４戸

移住体験住宅は2018年建築▶
子ども用チェアも用意

取組の成果・効果

既に保育園留学された方からは「また厚沢部に行きたい」と声があり、受け入れたこども園側でも、地元の園児たちが保育園留学の子からたくさんの刺激をもらい相乗効果があると話しています。４月以降の申込も１カ月で１００件を超えており、新たな関係人口創出につながっています。

また、「こども園」と「移住体験住宅」という地域の既存資産を活用し連動させ『保育園留学』という新たなパッケージを生み出したことが、地域活性化並びに雇用創出にも繋がると評価され、内閣府が運営する「地方創生ＳＤＧｓ官民連携プラットフォーム」の２０２１年優良事例として選出されました。

今後の取組の方向性

この『保育園留学』は厚沢部町に限らず過疎が進む自治体にとって、地域課題解決に寄与する事業となることから、自治体同士が連携し、ポータルサイトを共同により運営することで、募集・ＰＲの効率化を図ることも可能です。

また、法人向けの『保育園留学福利厚生プラン』の提供を開始し、既に導入を決めた企業もあることから、多様化する『働き方』と『子育て』における新たな取組の一つとして『保育園留学』を推進していきます。

体験者の声

令和３年７月と１２月にそれぞれ３週間保育園留学を体験した山本雅也さん家族

娘が２歳になり、言葉も興味の対象も一気に増えてこんなご時世だけどもっと色んな経験をさせてあげたい、もっと色んな景色を見せてあげたいと思い、保育園留学をすることに決めました。

初日の朝こそ、娘はこども園に預けた直後泣いてしまって心配しましたが、こども園で導入しているキッズリーの連絡帳で楽しそうに過ごしている娘の様子を見ることができて安心しました。施設の素晴らしさはもちろん、保育士の先生方がすごく気にかけてくれて本当にありがたかったです。夫婦ともにリモートワークの不安はありましたが、移住体験住宅と移住交流センターに分かれＷｉＦｉの問題もなく、娘が楽しんでくれている親としての充実感も相まって、仕事の生産性が上がった気がします。

保育園留学をきっかけに家族ぐるみで厚沢部町の暮らしに入らせてもらい、食育のような、旅行のような、ワーケーションのような、そのすべてが組み合わさったさらに豊かな体験でした。

本記事の内容は、厚沢部町政策推進課で担当しております。
〇事業に関するお問い合わせ先　TEL:0139-64-3312

『なおみちカフェ』から

～地域創生のヒントを探る～

なおみちカフェ

鈴木知事が、北海道創生に向けて、様々な分野で活躍されている方をお訪ねし、その取組や地域への思いなどをお聞きしています。同行した職員から皆様にその様子をお伝えします。

令和3年11月9日訪問

当麻町「サウナバス」・役場庁舎 編

今回紹介するのは、官民協働の「サウナバス」の取組や、町産木材の地産地消を進めている当麻町です。

はじめに知事がお話を伺ったのは、「made in 当麻町『〃 とのう〃 町』サウナプロジェクト」です。このプロジェクトは、町の豊富な自然を活かし、サウナを核とする地域活性化を目指すもので、町内の企業・団体とともに協働で取り組んでいます。

最初に進めた取組がこのプロジェクトの核となる、移動式の「サウナバス」の開発です。

車両は地元企業のトウマ電子工業（株）が自己負担でマイクロバスを改造して製作し、内装には当麻町森林組合が提供した町産のトドマツを使用しています。車内では、サウナストーンに水をかけて蒸気を発生させる本場フィンランドの入浴方法「ロウリュ」が楽しめます。

サウナファンをはじめとする全国の方々にご利用いただけるようサウナバスは、愛好家の間で使われるサウナ用語「ととのう」から、「当麻町ととのえバス」と名付けて、ふるさと納税の返礼品としてレンタルチケットの取扱いも開始しています。

次に、平成30年に完成した役場庁舎のお話を伺いました。町産木材の「地産地消」を普及推進するため、庁舎は、構造材や造作家具、仕上材に至るまで100％町産木材を使用しており、地元大工の技術力を活かして建築されました。

木の温もりあふれる執務室は、ワンフロアとすることで、住民が一つの窓口で手続きを済ますことができるワンストップサービスが可能となったほか、部門間の連携促進も図られています。

新技術によるカラマツ無垢材の構造材利用や、一般流通材による大空間の実現などが評価され、令和元年には「グッドデザイン賞」「赤れんが建築賞」をそれぞれ受賞しました。さらに、暖房には町産チップを燃料とした木質バイオマスボイラーを採用し、環境へも配慮しています。

町は今後とも、サウナバスによる交流人口の拡大や、町産木材の「地産地消」を推進することとしています。

当日の知事の言葉から

サウナバスはまさに官民が力を合わせて取り組んでいる事業であり全国的にも注目度の高いもの。私も服を着たままでしたがサウナを体験させていただきました。また、役場庁舎では、町産木材の地産地消を推進しており、ゼロカーボン北海道の実現にも寄与するものと感じました。こうした取組により、地域がより一層活発化していくことを期待しています。

▲サウナプロジェクトとして取り組んだサウナバス

なおみちカフェ（当麻町編）の動画はこちらからご覧いただけます。
（YouTubeチャンネル）

釧路編

令和3年12月17日訪問
厚浜（こうひん）木材加工協同組合 編

次に紹介するのは、釧路管内の地域木材の利用促進に取り組む浜中町の厚浜木材加工協同組合です。10企業のグループから成る同組合は、戦後植えられたカラマツ間伐材の有効利用を目的として昭和58年に設立されました。

慶伊勝司理事長、鈴木一浩理事に貯木場や製材工場などをご案内いただき、お話を伺いました。複数企業を1か所に集約した木材コンビナートでは、原木集荷から製材、製品、設計、加工、施工までの一貫体制を構築することで、コスト縮減と高付加価値化が図られています。

同組合では、釧路管内で成熟期を迎えているカラマツ・トドマツを加工し、主要構造部にカラマツ大断面集成材を用いることで大型化と多様性を実現し、通常木造では建築が難しい中大規模建築の木造化を推進しており、道内外において公共施設や学校、教育施設など幅広く利用されています。

また、管内で酪農業が盛んであることや、昨今の低炭素化やSDGsの動きに着目して、特に畜舎や農業関連施設の木造化の普及促進に力を入れています。大断面集成材を活用した木造の畜舎は、他の工法に比べてCO2排出が大幅に抑えられるほか、酪農家からは畜舎内の環境が良くなることで乳量・乳質等の改善に寄与しているとの声もあるそうです。

また、木材の「地産地消」を掲げる同組合では、建築される施設の木材にその地域の木材を使用する取組も進め実績を積んでいます。視察した木材コンビナート内の研修センター「森の学舎」も地域木材が利用されており、施設内には若い林業従事者が安心して共働きできるよう託児施設が併設されているなど、多様で安心な労働環境の整備についても取り組まれています。

当日の知事の言葉から

道産木材の利用を広げていくことは、地域資源の有効活用や、ゼロカーボン北海道の実現に向けて重要な取組です。

道としても、引き続き、道産木材製品のブランド「HOKKAIDO WOOD」のブランド力の強化に取り組んでまいりますので、今後とも道産木材のPRにご協力をお願いします。

なおみちカフェ（浜中町編）の動画はこちらからご覧いただけます。
（YouTubeチャンネル）

人と地域がつながる ベストな場所が 北海道にはある

つながる。HUBest（ハブ ハーベスト）

「つながる。ハーベスト」とは？

「新しい働き方」として注目されているワーケーション。その魅力のひとつでもある、人と地域とのつながりを通じて新たな活動を生みだすことができるワーク施設と、そこでの出会いを創り出すコンシェルジュをインタビュー形式で紹介します。

第一弾　札幌市

コワーキングカフェ&バー大人座
五十嵐　慎一郎 さん
（株式会社大人　代表取締役社長）

「大人座」とは？

――まずは、「大人座」のコンセプトについてお聞きしたいのですが。

「様々な出会いが生まれるカオスな秘密基地」ですかね。以前、東京で「the SNACK」というコワーキングスペースを運営してました。起業家やクリエイターなど様々な人が出入りして「こんなことやろうよ」とどんどん新たなプロジェクトやビジネスが生まれていたんです。地元の札幌でそういった化学反応を起こしている場所はとても少ない気がして。地元につくりたいな、つくっちゃおうと（笑）

――フットワークの軽さですね。

「コワーキングスペース」というと行きづらいというか、名前を知らない人も多いですし、行っていいのかな？となる人もいると思うので、小難しい場所じゃなくて、「大人座」っていう面白そうなカフェバーがあるから行ってみよう！となる場をつくろうという気持ちでやっていますね。

地域と「つながる。」

――大人座を通じた人と人とのつながりで新しい取組が生まれたなど、そういったエピソードをお聞かせ下さい。

今座っているカウンターの席で生まれたのが「あしたのしあたあ」というプロジェクトです。コロナ禍で色んなイベントが中止になる中で、それでも皆で楽しめることをやりたいねと飲みながら話していた、その時のアイデアの一つが、「ドライブインシアター」でした。その場で、「いいね、それやろうよ！」と地図サイトで大きな駐車場と白い壁がある場所を探すというスタートでした（笑）

その後、映画関係者はじめ賛同してくれる仲間も増えて、道内6箇所でドライブインシアターを開催しました。また、ラジオ電波で音楽を配信して、皆がイヤホンで聴きながら楽しむ「世界一静かなフェス」等の企画は、ここで飲みながら話していたのが形になったものです。

（大人座HP）www.otonaza.com

――コワーキングスペースならではの、「地域とつながる」エピソードについても教えて下さい。

大人座は「ほっとけないどう」というプロジェクトの拠点になっています。サッポロビール社の全面支援のもと、北海道で新たなチャレンジをする人のプレゼンイベントを定期開催しています。大人座やオンラインで購入したドリンクの売上の一部が、登壇者に寄付される「カンパイ★ファンディング」という仕組みになっています。大人座で飲めば飲むほど、北海道の応援になっちゃうんです。

――道外や札幌市外から来られる人に向けてメッセージをお願いします。

この数年で札幌も北海道もめちゃめちゃ動きが加速していると思うんですね。若い新しいプレイヤーが続々でてきていますし、そのプレイヤー同士がこの数年でかなりつながったと思います。道外から遊びにくる人がいらっしゃれば、是非色んな地域でチャレンジしている人たちと会ってもらいたいですし、こんな面白い人が地域にいるんだと知ってもらえると、北海道をより楽しめると思うので、是非単なる観光じゃない、もう一歩踏み込んだ北海道滞在をしてもらえると嬉しいです。

第二弾 厚真町

コミュニティスペースイチカラ 成田 智哉 さん

（マドラー株式会社代表）

「イチカラ」ができるまで

――どの様な経緯で「イチカラ」をつくることになったのか教えて下さい。

高校までは北海道にいて、大学で東京出て、その後トヨタ自動車に就職しました。ブラジル駐在もさせていただき楽しかったのですが、30歳の誕生日を機に独立しようと思い、何も決めないまま辞めちゃいました。ちょうど北海道胆振東部地震が発生した時期で、私自身も大都市よりも田舎で起業した方が面白いんじゃないかと考えていた時に、「厚真町ローカルベンチャースクール※」を紹介いただき、地元（千歳市）の隣町で、地域の方々が震災もあったけど頑張ろうとしているし、前向きな行政の方もいるから、厚真町で起業しようと決めました。

※ 町が起業など新しい価値創造にチャレンジする人を発掘・支援・育成するプログラム

――人のつながりを生かして、地域の課題を解決されたいという思いでイチカラをつくられたのでしょうか？

厚真に来るか決まっていないタイミングで、役場の方から、震災で皆の心の安住の場もなくなったので、皆が集まれる基地みたいな場所が欲しいという話をいただき、自分自身全国各地でコミュニティのハブとなる施設やコワーキングスペース等をよく活用していたので、厚真にもそういう場所が必要だと思いました。

この物件も、町の一丁目一番地で、いわば厚真のスクランブル交差点みたいな場所なんですが、10年以上シャッターが下りていたので、ここが開くこと自体が復興につながり、地域を元気づけられるだろうと考えました。

地域と「つながる。」

――イチカラで人と関わるときに、大切にされていることなどはありますか？

ここは、町内のおじいちゃんやおばあちゃんが、ボランティア活動の帰りに寄ってくれたり、毎週水曜日の夜は「中学生の日」ということで、中学生が勉強したり、漫画を読んだりしています。

一方で、札幌や東京から来られる方も結構います。イチカラを運営する私の会社「マドラー（株）」にはそういった様々な方をかき混ぜるという意味があって、普段出会わない方達の接点となればと思っています。

――イチカラで生まれた人同士のつながりのエピソードがあれば教えて下さい。

今はコロナの影響で出来ていないですが、70～80歳のおじいちゃんが肺活量を増やすために「ウェルネス吹き矢」をやりたいと言って、ダーツバーを真似て「吹き矢バー」をやろうとしていました（笑）やりたいものを持ち寄ってくれるので、皆で一緒にやったりしています。

強みは「解像度」

「マドラー」の強みは、大企業とか都会のこと、テクノロジーも理解しつつ、都会の人たちが思いもよらないことを目の前で見ている「解像度」です。

東京から見る景色とこちらで見る景色にはズレがあるので。こちらが解像度を高くやっているからこそ見えている景色を提供してあげられるし、それが制度に生かされるかもしれない。だから、中央省庁や大企業、ベンチャー企業の方達も興味を持ってきてもらい、教育や福祉とかのリアリティを感じてもらえるといいなと思います。

（イチカラ）atsumaichikara.mystrikingly.com

このインタビュー記事は、誌面の都合により抜粋版を掲載しています。
インタビュー全文については、北海道公式ＨＰにて公開していますので、是非ご覧ください。

インタビュー全文はHPをCheck!

該当する施設を月１回程度、HPでご紹介！

「つながる。ハーベスト」対象施設

○テレワークができる施設
○地域を知るコンシェルジュがいる施設
○誰もが気軽に利用できる施設
○地域住民も利用している施設

本記事の内容は、北海道総合政策部地域創生局地域政策課で担当しております。
○事業に関するお問い合わせ先 TEL：011-204-5089

創る
令和4年3月発行
発行：北海道総合政策部地域創生局地域戦略課　電話（直通）：011-206-7298

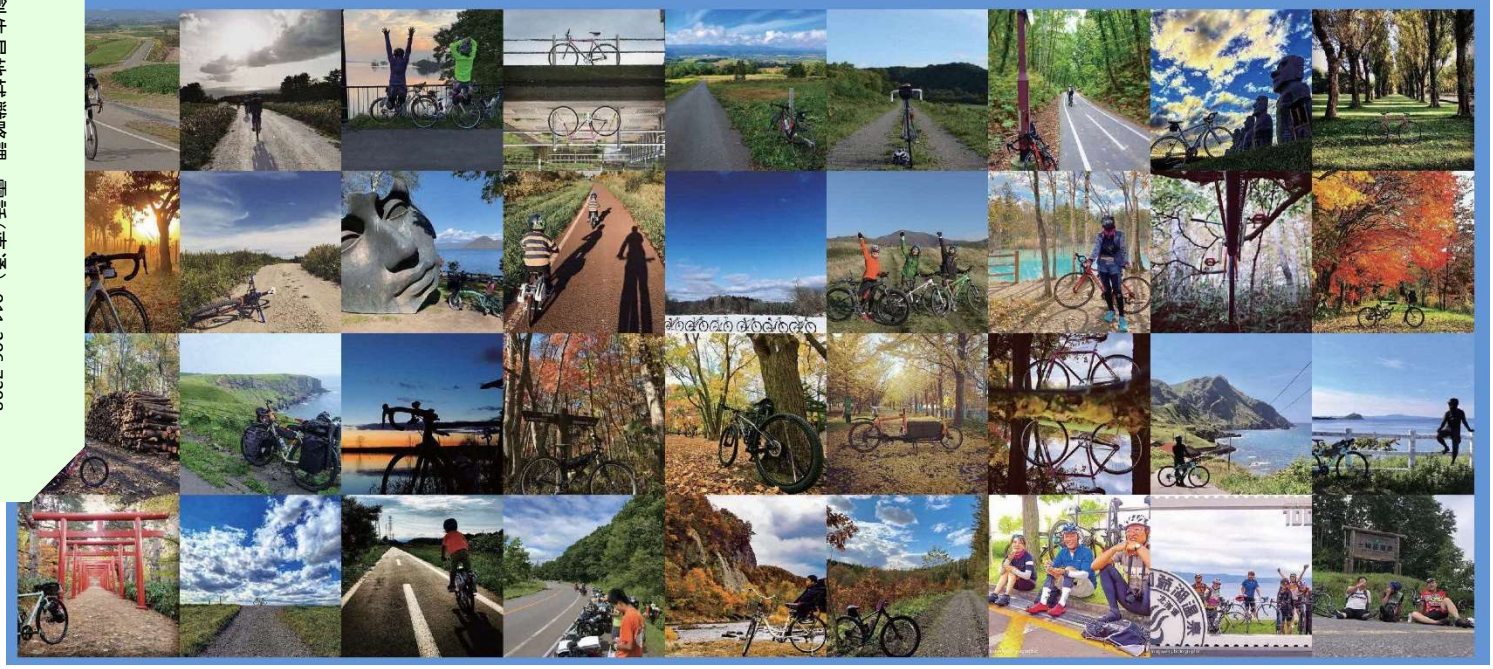
環境に◎ 観光に◎ 健康に◎

もっと、自転車北海道。

「もっと、自転車北海道。」
公式Instagramをフォローして、

みんなで、北海道での
自転車利用の魅力を発信しよう！

#もっと自転車北海道



Environment 地球に優しい クリーンな乗り物
環境に◎

自転車は、他の交通手段と比べても地球温暖化の原因となる CO_2 などの排出物を出さない、地球に優しいエコでクリーンな乗り物。
通勤、通学、買い物に使って、環境に◎（マル）！

Tourism 世界が注目の サイクリング環境
観光に◎

冷涼な気候、豊かな自然、広い道路などなど、北海道の魅力は世界も注目。
あなたもそんな北海道を自転車で楽しんでみませんか？きっと新しい発見があるはず！観光に◎（マル）！

Health カラダにやさしい 有酸素運動
健康に◎

何か健康のために始めたい…でも何を始めたらいいかわからない…自転車はそんなあなたの味方です！足腰への負担が少なく、しかも有酸素運動。
カラダにやさしい効果抜群の自転車で健康に◎（マル）！

自転車・自動車がお互いを思いやる環境づくりを進める
「フレンドリーロード北海道」

フレンドリーロード北海道　検索

Friendly Road Hokkaido
もっと、自転車 北海道。

「創る」バックナンバーは、“ほっかいどう応援団会議ポータルサイト“へ

QRコード読取で
バックナンバーへ

ほっかいどう応援団会議　検索

URL： https://hkd-ouendankaigi.jp/info/tukuru.html